# 『明暗』小論

## ――津田における「暗い不可思議な力」をめぐって――

呉　俊　永

### 一　はじめに

『明暗』は、津田の病気を診察する医師と津田との問答場面から始まっている。津田の病気は「今迄の様に穴の掃除ばかりしてゐては駄目」（一）だから、「根本的の手術を一思ひに遣るより外に仕方が」（同）ない。幸いに「結核性ぢゃ」（同）ないから、病気は「本式に癒る」（同）はずであると医師はいう。小宮豊隆は、この冒頭部を「そのままで、『明暗』一篇のキイノートの役目を勤めてゐる」とみて、その結末で津田の「精神上の病気」（エゴイズム）が「根本的の手術」を受けると予想する。[1] また唐木順三も、この医師を作者自身の仮託と見、津田の「病源が解つてゐる医者からみれば、明へ出ることに疑ひはない。かくして『明暗』一篇は津田の精神更生記であることが、その第一節において約束された」と説く。[2] 両氏のいうように、小説の書き出しにこのような場面がさりげなく使用されているのは、この場面を作品の伏線として設定し、暗示的な機能を果たさせるためであるとみてよかろう。

こうした両氏の見解を認めながらも、さらに第二章の津田の独白に重点を置く学者に重松泰雄氏がいる。氏は、「むしろこれらの対話は、より重大な次章の一節を引き出す導入部として注目すべきものであろう」[3] といって、第二章の津田のつぶやき、すなわち、肉体上の病気から始まって、やがてはおのれを自在に操る「暗い不可思議な力」を想像するといった想念の連鎖に着眼している。医師の言葉と主人公津田の内面的な想念という違いはあっても、いずれも暗示に富んだこの冒頭部の重要さを指摘する点で共通している。

『明暗』という作品の一つのモチーフが、主人公津田が自分にかけられた謎、すなわち突然で予想外な清子の離反をめ

ぐって、その理由を突き止めるまでの過程にあるとみる場合に、重松氏の指摘通り、この冒頭における津田の想念は大きな意味をもつ。もともと津田の「精神上の病気」が真に治癒されるためには、「手術」という外部的な方法が必要かもしれないが、もっと根本的には、かれが想到した「暗い不可思議な力」がいったい何なのかを認知するといった、内部的な自己内省が必要とされる。このような主題に至るモチーフからすれば、津田の内部に自己内省を導くための布石が必要になってくるわけである。小説の始発部から、主人公津田をして自家撞着に直面させ、そこから自己の理性と意志を超えて自己を自由自在に操る「暗い不可思議な力」に想到させるといった設定が、その布石とみてよかろう。津田にとっては、この自己の内部にうごめく「暗い不可思議な力」が何なのかを見つめることによってしか、自分の「精神上の病気」は治癒されることはない。作者漱石にとっては、近代的な自我意識が必然的にかかえこんでいる、その負的な側面であるエゴイズムの本質をつきつめようとする意図が、ここにあると思われる。本稿では、以上の諸氏の見解をふまえて、そうした津田における「暗い不可思議な力」とは何であるかを考察してみたい。

## 二　津田における「暗い不可思議な力」

津田は医師から、自分の病気は「根本的の手術」を受ければ完治するという診断を聞かされたが、なんとなく心細くなる。押し寄せる不安を押さえ切れなくなっているのだ。帰宅の電車の中で、「何等の豫告なしに突發した」（二）去年の疼痛をふと思い出して、その原因を探し出そうと考えをめぐらすが、なかなか見当がつかない。明らかにその原因は存在しているはずなのにと思っているうちに、かれは精神界にも連想が及び、精神も同じようなもので「何時どう變るか分らない」（同）という恐怖に襲われる。しかし、その精神界では実際「變る所を己は見た」（同）と心の内で叫ぶ。その叫びは、自分の肉体上のことでありながら、自分でもどうしようもできないといった焦燥がもたらす不安の代償としてのそれであろう。そうした自分のありように始めて気がつき、理性と意志を抑えられたことで自尊心を傷つけられた津田は、それを紛らわすために二三日前ある友達から聞いたポアンカレーの話を思い出す。

その話というのは、「偶然」の出来事とは「原因があまりに複雑過ぎて一寸見當が付かない時に云ふのだ」（同）といった内容の話であるが、津田はその話を自分のありように当てはめて、自分を自在に操る「暗い不可思議な力」（同）に思

い到る。津田は「ついぞ今迄自分の行動に就いて他から牽制を受けた覺がなかつた」し、「爲る事はみんな自分の力で爲、言ふ事は悉く自分の力で言つたに相違なかつた」(同)にもかかわらず、結果は当初の意図からあまりにも懸け離れている。そのために、その背後に「暗い不可思議な力」を感じざるを得ず、その力に驚かざるを得なかった。

ここまで考えをめぐらしてきた津田の想念は、いきなりかつての恋人清子に向けられる。清子は津田と結婚するのではないかと思われたとき、一言も告げずに突然彼のもとを立ち去ったのであった。津田は彼女の離反の理由がわからなかったのだが、その不可解さを胸に秘めて、いまの妻お延と結婚したのである。が、いまふりかえれば、その結婚の動機さえ自分ながらはっきりしていない。だから、そうした自分の身の上の変化を「偶然?ポアンカレーの所謂複雑の極致?」(同)とつぶやかざるを得なかった。

津田が想到した「暗い不可思議な力」とはいったいなんであろうか。作者が冒頭部を割いて、津田をして「暗い不可思議な力」に直面させた理由はどこにあるのだろうか。大学出の、しかも洋書が読めるほどの知性を備えている津田に、「ある友達」(同)がわざわざ「彼の爲に」(同)説明してくれた「偶然」の意味を、ここであらためて検討しておく必要があると思う。というのは、津田がその「偶然」の話を自分の身の上に当てはめたとき「暗い不可思議な力」に想到したからである。

「だから君、普通世間で偶然だ偶然だといふ、所謂偶然の出來事といふのは、ポアンカレーの説によると、原因があまりに複雑過ぎて一寸見當が付かない時に云ふのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精蟲の配合が必要で、其必要な配合が出來得るためには、又何んな條件が必要であつたかと考へて見ると、殆んど想像が付かないだらう」　(二)

つまり、「偶然の出來事」と呼ばれるどんな現象にも、その深層には必ずその原因が存在している。しかし、それがあまりに複雑すぎて人々はそれを探そうとしないというのである。津田がこの話を「暗い不可思議な力」と結びつけたのは、清子の行動や自己の言動の不可解さの深層にも、なにかしらかれの知性を超えた因果関係がひそんでいることを感知したからかもしれない。

もし、その「暗い不可思議な力」が津田にとっては自己の内なる〈他者〉の直観(触知)だったとすれば、津田との結

婚を拒否して去った清子は、自己の内なる〈他者〉を直観させてくれた人物であるといえる。しかも、この小説の始発部における清子は、津田の想念の内にしか存在していない。とすれば、彼女は津田の内部にひそんでいる〈他者〉とつねに結びついて思い出される人物であったことになる。津田の想念にとっては、おのれの意志や理性ではどうにもならぬ、自己の内なる〈他者〉と重なるために、自分の意志に逆らって去った清子がかれの自尊心を傷つけたのである。いうまでもなく、人は他者が自己の意志を妨げて立ちはだかるとき、その自尊心は傷つけられる。津田がその苦痛を紛らわすために「偶然？」の出来事、「暗い不可思議な力」によるものとみずからを納得させようとしたのは自然なことであろう。しかしそのことは逆に、津田が知性や理性の奥にひそむ何ものかをさらに追究して明らかにするといった努力を放棄してしまったことをも意味する。

津田はすべての言動を「たゞ行つた」（一一五）だけで、「少し深く入り込むと、自分で自分の立場が分らなくなる丈」（同）であって、かれの知性を超えて存在する因果関係についてはまったく見つめようとはしない。ただしかし、津田にとってはその〈力〉が、自己の理性的であるはずの主体の暗部にひそむ、ある種の他者性を帯びた非合理的・非意志的な〈力〉であるかもしれないということは直観したといえよう。こうして津田が「暗い不可思議な力」に思い当たったにもかかわらず、その追究を放棄することで自己の内なる〈他者〉を認めようとはしない、また認めたくないという彼の考え方・生き方にとっては、「暗い不可思議な力」への想到はまさに皮肉な想念の自家撞着であったといえる。

そして、津田がその自己の内なる〈他者〉に自尊心を傷つけられたというところに彼の性格をみてとってよいのではなかろうか。すなわち、そのあまりにも偏狭な自尊心は外部の他者ばかりでなく、自己の内部に存在する〈他者〉を受け入れる知性や理性のはたらきを嫌悪することでもある。それがとりもなおさず、津田の生き方を律していたエゴイズムの本質であった。いままでの利己的な、また我執に充ちた津田の生き方そのものであった。したがって、清子が津田の前から去ったということは、いわば、このような津田の生き方への本質的な威嚇であったといえる。

だとすれば、以降、傷つけられた自尊心を回復しようとする津田の言動を予測するのはたやすいし、またその言動が清子の仕掛けた謎ときという行動様式で表面化するだろうという予測も可能である。清子が静養している温泉場へと向かう津田の行動を支配している動機は、清子がどうして自分のもとを去ったのかの真の意図を知るところにあることはいうまでもないが、しかし究極においては、津田自身の知性や理性の奥にひそむ因果関係そのものを知ることであったといって

よかろう。清子の心の内部にうごめくものこそ、実は津田の視点からは「暗い不可思議な力」として直観されるところのそれであった。この仕掛けが一篇の『明暗』の構造とみられる。したがって、その構造が津田と清子の関係性そのものに、津田の心理における表層（明）と深層（暗）の相克を象徴的に結像していくことになる。

## 三　温泉場への旅ー「輕便」に託された暗示ー

退院した津田は医師に引き止められるのを恐れて、一言も相談をせずに、清子の逗留している温泉場へ行くことを決心する。津田の決意をうながした直接的な要因としては、吉川夫人の勧めが大きく影響していたにしても、その一方で、かれ自身の心にも清子に対する未練が深く残っていた。「吉川夫人に此温泉行を勧められない前から、（中略）實は突然清子に脊中を向けられた其刹那から、自分はもう既にこの夢のやうなものに祟られてゐるのだ」（一七一）とか、あるいは「別れて以來一年近く經つ今日迄、いまだ此女の記憶を失くした覺がなかつた」（一七二）という述懐は、温泉場行きの真の動機がどこにあったのかを説明している。

こうして温泉場へ向かう津田の頭のなかには、絶えずまとまらないイメージが浮かんでは消えていく。津田はこの旅が順調にはいかないのではないかということを、「輕便」（一六八）という語から「一種の暗示」（同）として予感していたので、そこからくる不安や懐疑、そしてそれに対抗するかのように胸の片隅にまだ残る自信などが錯綜して彼の心をかき乱す。津田は列車の中で二人の行きずりの男と乗り合わせる。二人の男の交わしている対話のなかでなにげなく話された「途中で汽罐へ穴が開いて動けなくなる汽車なんだから、全くの所心細いにや違ない」（同）という言葉を耳にして、津田はふと、これから自分の身をゆだねようとする軽便鉄道が、「彼等のいふ通り亂暴至極のものならば、此雨中何んな災難に會はないとも限らな」（同）いという不安に襲われる。津田を乗せる乗り物は「雨曝し」（同）の「輕便」であり、しかも「汽罐へ穴が開いて動けなくなる」ことが度々ある不確実なものであった。その言葉から読者はいみじくも津田の肉体の欠陥に思い当たるのではなかろうか。かれの肉体も「矢張穴が腸迄續いてゐる」（一）からである。津田にとっては、行きずりの男のなにげない言葉がかれ自身の身の上にかかわる象徴として受けとれる。壊れやすいと危惧されている「輕便」とは津田の肉体を象徴するものとなる。しかもそれだけではない。津田はさらに「清子と其輕便とを聯結」（一六八）

して考えている。津田はそれと意識することはないが、今度の自分の旅をいざなっているのが清子であることを予感している。このことは、さきほどの冒頭部において津田の想念にとっては、清子という女性が「暗い不可思議な力」を認識させてくれた存在であったことと照応する。それはまさに「津田に取つてたしかに一種の暗示」（同）であったのだ。津田はいま、その清子によって温泉場へと引き寄せられている。

軽便の中で道連れとなった老人は、絶えず「津田の注意を誘ひ出さうと」（一七〇）して、こちらが問いかけたわけでもないのに、この軽便がいま渡っている橋は仮橋であり、本式の橋は去年の出水で押し流されたまま、まだ掛けられていないと津田に説明してくれる。津田の清子との因縁の橋も去年洪水によって突然切られてしまった。それゆえに、いまの清子に会うためのかけ橋は仮橋にすぎないのではないか。老人はまた「あの家も去年波で浚はれちまつたんでさあ。でもすぐあんなに建てやがつたから、輕便より少しや感心だ」（同）という。これも実は津田の境遇にとっては暗示的な言葉であることが読者に知られる。「あの家」とは、去年津田と清子が作るはずだった「家庭」に相当する。しかし「波で浚はれ」た。つまり、清子が去ってしまったという破綻によって雲散霧消してしまった。そして「すぐあんなに建てやがつた」家というのはお延との「家庭」である。津田はいま、不確実な「輕便」に乗って清子と再会すべく旅立った。「輕便より少しや感心だ」とは、いまのお延との家庭が、よしんば急造の不安定なものだとしても、この旅を通して得られるかも知れない清子との家庭よりはましだという暗示ともみられる。

もちろん、津田はそれらすべてをそれと意識して受けとっているわけではない。が、この道連れとなった二人の会話を聞くともなしに聞いた端々の言葉は、「津田に取つてたしかに一種の暗示」であった。読者にはそう読みとれるし、後述するこの小説の仕掛けからいっても、積極的にそう読みとらねばならないのだ。それにこの二人の男の言葉はまた、以後のプロットにとっては伏線ともなるものであった。いや、ある言葉はたんにプロットの伏線となるだけではない。すぐれて象徴的修辞ともなっている。次の引用の「蜜柑」がそれだ。

其山の多くは隙間なく植付けられた蜜柑の色で、暖かい南國の秋を、美くしい空の下に累々と點綴してゐた。

「あいつは旨さうだね」

「なに根つから旨くないんだ、此所から見てゐる方が餘つ程綺麗だよ」　（一七〇）

南国の秋の「蜜柑」は、ここでは叙景であるとともに、これから出会おうとする清子の象徴ともなっている。遠くから見ると、その「蜜柑」は実にうまそうに見える。しかし、「なに根つから旨くないんだ、此所から見てゐる方が餘つ程綺麗だよ」と隣り合わせのもう一人がこともなげにいう。そのなにげない言葉は、津田の想念にとっては、「湯治場の中心點になつてゐる清子に飛び移つた」（一七〇）ときに発せられた。とすれば、その言葉は津田にはすぐれて「暗示」的な言葉ともなる。すなわち、〈今お前が思いこがれている清子は、お前の想念の中でのみ美しいのだ。その想念と現実の間にははなはだしい距離があるんだよ。その現実を眼にしたときには、失望するに決まっているんだ〉という暗示となることで、以後のプロットの伏線であることを読者に悟らせる。

この津田の旅において、行きずりの二人の人物の設定は重要な意味をもつように思われる。二人の対話は津田の揺れ動く心の表層に対して、深層にひそむ潜在意識の形象ともなっているのではなかろうか。すなわち、この場面にみられる津田の心中思惟語がその表層の意識だとすれば、二人の対話のもつ暗示性は、その深層に秘められた潜在意識を象徴する。したがってかれらの対話は、まるで津田の心理の奥にある自己の内なる〈他者〉の声のようでもある。この二人は、冒頭の医師や「偶然」の話を聞かせてくれた「ある友達」のように、読者には名前を知らせていない。この四人の人物は、いずれも津田の運命を暗示するような言葉を「活溌にまた無雑作に」（一）口にする。唐木順三は、そのうちの無名の医師を作者自身の仮託とみているが、かれを安易に作者と結びつけてはならない。むしろ『明暗』のなかで名前を知らされないこれらの四人は、いずれもこの小説の冒頭部において津田に想起された「暗い不可思議な力」に照応して結像された登場人物なのだ。温泉場に向かう津田は、その旅の途次、「暗い不可思議な力」である自己の内なる〈他者〉と向かい合っていたのである。この旅の場面から、津田のモノローグはその見えない闇の空間に自己の内なる〈他者〉を据えた、ある種のダイアローグとなるように仕掛けられているのだ。ただ注意せねばならないのは、その構造は読者にわかるだけであって、津田自身には自覚されていないということである。

## 四　日常の世界から非日常の世界へ

このように、津田が自己の内なる〈他者〉と向かい合うという構造は、「輕便」を降りたあとも別の変奏をとって仕掛

けられている。しかも、それは「輕便」の車中の場面よりももっと明確に象徴性を帯びている。

温泉場に着いた津田の前には、まるで「寂寞たる夢」（一七一）のような町が現れる。津田にとってその町は「夢といふ感じ」（同）そのものである。そこはいままで住み慣れていた日常の世界とはまったく違う異空間であった。石崎等氏は、「プロットを重んじた漱石にとって、空間を移動する汽車は魅力的な乗り物」[4]であるといって、漱石の作品世界の中での汽車の果たす役割を指摘しているが、この『明暗』でも、汽車は単なる空間移動の乗り物という次元を超えて、津田を非日常の世界へと運び込むプロット上の転換をももたらしているとみてよかろう。津田にとって場そのものが象徴的空間となる。そのとき、場を枠どる「夢」という語の頻出には注意する必要がある。

非日常の世界の中に足を踏み入れた津田は、「夢見たやうな」（同）情景を目にしつつ、「突然清子に脊中を向けられた其刹那から、自分はもう既にこの夢のやうなものに祟られてゐるのだ。さうして今丁度その夢を追懸やうとしてゐる途中なのだ」（同）と、自分が清子の離反によって運命づけられていることを自覚するのだが、「夢」というキー・ワードが象徴空間と津田の深層心理とを照応させる。

津田は温泉宿へ向かう馬車のなかで、「濫りなる鞭」（一七二）を打たれながら走っている「痩馬」（同）に自分の姿を見出す。そして「それに手荒な鞭を加へるものは誰なのだらう」（同）と、いまの自分を駆り立てる者は誰であるのかについての疑念がわく。しかしながら、津田はそれについて「精確な解決を付ける事を好まなかつた」（同）。そのことは「手荒な鞭を加へるもの」が、ほかならぬ清子であること――ひいては清子の離反によって運命づけられ、自己の内なる〈他者〉と向かい会おうとする潜在意識――を充分直観していたからである。

馬車が温泉宿に着こうとするとき、津田は町の電灯を眼にしつつ「其光の一つが、今清子の姿を照らしてゐるかも知れない」（同）と思うや、ここでもふと「運命の宿火だ。それを目標（めあて）に辿りつくより外に途はない」（同）とつぶやく。津田の「目標（めあて）」というのは、具体的にいえば、清子に会って自分のもとを去った理由を問いただすことであるが、「運命の宿火」という言葉にはもっと重い響きがひそんでいるように思われる。ここまで来ることをうながす、心の深層にひそんでいる因果律を直観した言葉ではなかろうか。だから津田は、「夢見たやうな」空間を彷徨する自分の姿に対して、いま「偶然」という言葉を使わなかったのである。いや、使えなかったのであろう。

その津田は、今度は高い樹と渓流の音を前にして、「忘れた記憶を思ひ出した時のやうな氣分」（同）になる。そして「あゝ

世の中には、斯んなものが存在してゐたのだつけ、何うして今迄それを忘れてゐたのだらう」（同）という「不時の一轉化」（一七二）を覚える。つまり津田にとっては、こうした自覚はかつて起こらなかったのだが、この温泉場に着いてからは絶えず自己の内面を覗き見ようとするようになった、ということであろう。非日常の異空間で、心の深層にひそむもう一人の〈他者〉に津田は気づき始めたのだ。

こうした津田の自覚、というよりも直観は、彼の温泉場行きの旅が現実の日常的な時空から切り離され、想念の内なる非日常の世界に彷徨するかたちで空間化されたところに生じたのだが、その想念の彷徨はとりもなおさず、みずからの内面に降り立ち、その深層を突き止め、またこれまでの精神の軌跡をたどろうとする個我としての自覚の始まりなのである。その始まりはまず津田の小自我の崩壊がきっかけとなる。「容易に己れを忘れる事の出來ない性質」（九七）であり、いつも「自己を裕に有つてゐ」（一一）る自意識家津田が、「常軌を逸した心理作用の支配を受け」（一七七）るところに、それはまずみられる。そうして以降の津田は、「もう自分の主人公ではなかつた」（一七一）し、ただちに「夢中歩行者」（一七七）にならざるをえなかった。この場面でよく用いられる「夢」とは、小自我が崩壊したあとにむき出しとなる潜在意識を象徴する言葉（記号）でもあった。

よく指摘されるように、『明暗』はこの温泉場の場面から急に作調（トーン）を変えてきている。自然の情景と主人公津田の内面の描写―さらには「夢」の内なる深層心理の象徴的描写―とがほとんどオーバーラップされてくるのである。小自我の崩壊というモチーフは、このような場面描写のなかにひそやかにすべり込んでいる。たとえば、次の場面は自然に触発された津田の想念がただちに清子に結びつけられる部分である。

「（前略）松の色と水の音、それは今全く忘れてゐた山と渓の存在を憶ひ出させた。全く忘れてゐない彼女、想像の眼先にちら〳〵する彼女、わざ〳〵東京から後を跟けて來た彼女、は何んな影響を彼の上に起すのだらう」

冷たい山間の空氣と、其山を神秘的に黒くぼかす夜の色と、其夜の色の中に自分の存在を呑み盡された津田とが一度に重なり合つた時、彼は思はず恐れた。ぞつとした。（一七二）

津田はこの温泉場に来てはじめて、いままでの生活が虚偽に充ちた生活であったことを悟らされる。津田は「生活する

事の出來るために、嘘が必要になるのだ」（一一五）という人生観のもとに生きてきた。したがって、ここで覚えた恐怖は、その虚偽に満ちたみずからの存在に対するおぞましさの素直な実感であるとともに、自分の運命の手綱をとっている清子に対する畏怖でもある。この部分について、三好行雄氏は「ついに問うことのなかった存在の根拠を、闇に呑まれて自己を喪失した恐怖という形で、（意識化されない刹那の感覚として）触知したのである」といい、「帰属の実感や存在の確証は、喪失のおびえや不安を体験することなしに、認識の対象にならないものであろう」[5]と敷衍する。加藤二郎氏は、「清子への想念が齎したものとしての彼の存在性の本質的な破れ、即ち『夜の色』への自己存在の併呑化という形での津田の自己喪失への『恐れ』であったと言える」[6]という。

両氏が考察するとおり、この「恐れ」は津田の自己喪失への恐れであるといってよかろう。しかし、その〈自己喪失への恐れ〉という解釈は、これまで論述してきたところの温泉場行きの旅立ち以降の津田にみられる、この小説のとった仕掛けのなかでこそ意味をもつというべきである。すなわち、筆者のいう〈小自我の崩壊〉を経ることで、いま津田は自己の内なる〈他者〉と向かい合う予感を得たときの身ぶるい、恐れということである。それを自己省察への兆しととってもよかろう。津田にとって自己への省察ということは、とりもなおさず、これまでの自己の言動を支配してきたところの心の深奥にひそんでいる「暗い不可思議な力」とは何なのかを省察することであった。この自己の内なる〈他者〉と向かい合うのではないかという予感がいま「彼女、は何んな影響を彼の上に起すのだらう」という自問によって小説としての形象を得ていることはいうまでもなかろう。

## 五　「魔境」での清子との出会い

津田が自己の内なる〈他者〉と向かい合うといった象徴的場面のクライマックスは温泉場の洗面所で津田が眼にする一光景であろう。宿に着いた津田は、風呂から出て自分の部屋に戻る途中、「迷宮（メーズ）」（一三九）のような廊下で道に迷う。廊下でまごついていた津田は、洗面所にある四つの金盥に気を奪われ、そのなかにある「不定な渦」（一七五）から妙な刺激を感じる。いってみれば、渦とは単なる水の回転運動に過ぎないが、津田はなぜかそれに刺激を感じる。もし回転運動をなさしめる原動力―渦という現象の深層にひそんでいる因果律―が静止していた水を動なる渦にするためには、ある

外部的なベクトルが要求される。津田が妙な刺激を受けたのは、そのベクトルと回転運動という因果関係をふと直観させられたからではなかろうか。どうして津田がそんな奇妙な刺激を受けたのかといえば、温泉場がかれにとっては「魔境」（一七八）であったからとしかいいようがない。「魔境」にあって「夢」のような心理状態にある津田にはすでに〈小自我の崩壊〉が始まっており、なにげない光景に〈小自我〉を支配してきた深層の因果律を覗き見ようとする姿勢がかれをとらえてやまないのである。

坂口曜子氏は、その「渦」を人間の無意識の暗部で音もなく進行し、いつかは明部に露呈、破裂する因縁の螺旋運動の象徴としてとらえているが[7]、この見解にはうなずけるところがある。というのは、「暗い不可思議な力」とは、津田からとらえられた概念にすぎないのであって、それは深層心理学的にいえば、心の深層に存在する因果関係だからである。その〈力〉はある原動力となっていつかは表層に露呈、破裂する。「水道ばかりを使ひ慣れて來た津田」（同）は「水道」に代表される日常の空間に身を置き、その日常性に慣れているにもかかわらず、その「渦」に気をとられるや、自分の居場所を忘れてしまったというのは、その「渦」に象徴される「暗い不可思議な力」へと視線が凝固してしまったからであった。

その「渦」から眼をそらした津田は、今度は「同じ視線が突然人の姿に行き當つた」（同）ので少なからず驚く。鏡の前に立っていたのだ。鏡の前ではいつも自信を感じてきた津田であったが、今度はいつもと違った「不満足な印象」（同）を覚えた。それゆえ「是は自分の幽霊だといふ氣」（同）に襲われる。一般的に鏡はナルシシズムと結びついたり、あるいは人間に自己省察の機会を与えたりする小道具であるが、漱石においても例外ではない。たとえば、『吾輩は猫である』（明治三八年一月～同三九年八月）のなかに、「鏡は己惚の醸造器である如く、同時に自慢の消毒器である」（九）という表現があるが、ここでは鏡が、津田のナルシシズムを助長する「己惚の醸造器」としてではなく、「自慢の消毒器」としてはたらいているといえる。とすれば、津田がその「自慢の消毒器」を通して見た「自分の幽霊」とは、かれの内なる〈他者〉ではなかろうか。津田が「相手の自分である事に氣が付いた後でも、猶鏡から眼を放す事が出來なかつた」（一七五）理由はそこにあったと解釈される。しかし、津田は「其意味が解せなかつた」（同）ために、「わざと落付いて綺麗に自分の髪を分け」（同）ることで、またいつものナルシシズムに陥ち入る。

「故の我に立ち返つた」（同）津田は、ひっそりした夜の空気のなかに、二階から障子の開閉音を聞く。すると津田は、

「既に死んだと思つたものが急に蘇つた時に感ずる驚ろきと同じ」（一七六）ような恐怖に襲われるのだが、それは清子との思いがけない出会いが、どれほど衝撃的かということの前触れであった。津田はその音とともに「容赦なく現はれた」（同）清子の姿に、いましがた受けた驚きよりも「何十倍か強烈な驚ろきに囚はれ」（同）たのである。

念願の清子との出会いは「突然」（同）であった。そのために津田にとっては予期に反して、清子に対して「警戒」「注意」（一七七）の視線を投げかけるばかりであった。温泉町に着いてから清子と出会うまでの津田の体験描写に、突発性を示す言葉―たとえば「突然」「不意」「急に」など―が、頻出しているが、この点からみても津田にとっては、これまでの温泉場の体験はすべてが衝撃的なものであったということになる。

ところで、漱石がこの「突然」という言葉に特別な意味を付与していることに注目する必要がある。漱石の『文学論』（明治四十年五月）によれば、

> 只變化の至る迄内に昂騰しつゝある新意識を自覺する能はざるが故に此種の推移に逢へば之を突然と云ふ。表面は突然なり。去れども内實は次第なり。
>
> （第五編第二章　意識推移の原則）

ということで、漱石は「突然」という言葉を因果律（「次第」）としてとらえていることがわかる。類似概念の「偶然」が冒頭部の津田の脳裏に浮かんだというのも、決して文字通りの偶然ではないだろう。もちろん、『明暗』が新聞小説であることを考慮したとき、毎日千二百字から千六百字ぐらいの分量[8]で、一回ごとに場面としてのヤマをもち、翌日への期待をつなぐためには、突発性をあらわす言葉系の多用が必要であったのかもしれない。が、一方では、その言葉の裏面にひそんでいる因果律を暗示することによって、表層に起こる現象の突発性には、その深層を流れる因果律があるということを印象づけようとしているようにみえる。この「突然」という言葉を、作品の上の一つのキー・ワードととらえ、新しいアプローチを試みた清水孝純氏は、その使用を「作者のはっきりした作意によるものだろう[9]」といっている。とすれば、この言葉を多用する意図には、やはり津田にとっての清子の存在が「暗い不可思議な力」、すなわちかれの心理の深層にひそんでいる因果律と固く結びついていたことを伝えようとする作者の作意を読みとってよかろう。

## 六　津田にあらわれる自己省察への兆し

津田にとっての異常な体験、すなわち〈小自我の崩壊〉の感覚は、温泉場の夜の暗がりと結びついていた。夜の温泉場という「魔境」はまさに、明暗の暗の世界のなかで津田が「暗い不可思議な力」と向かい合うといった象徴的場面がプロットをなしていた。しかし翌日の朝になって、明の世界が訪れるとともに、津田の日常的知性や理性が活発にはたらき出す。

翌日の朝、津田は昨夜の「魔境から今漸く覺醒した人のやうな眼」（一七八）を周囲に向ける。万象があからさまに見える現実の世界で、津田は昨夜自分の睡眠を妨げた水音の実体が人工的にこしらえた庭、しかも「平凡といふより寧ろ卑俗」（同）な庭に添えてある噴水の音であったことを確かめる。

> 昨夜彼の睡眠を悩ました細工の源を、苦笑しながら明らさまに見た時、彼の聯想はすぐ此水音以上に何倍か彼を苦しめた清子の方へ推し移った。大根（おほね）を洗へばそれも此噴水同様に殺風景なものかも知れない、いやもしそれが此噴水同様に無意味なものであったら堪らないと彼は考へた。（一七八）

自分の異常な心理状態がとらえた幻像と実像との間に確然たる隔たりがあることに気づき、苦笑せざるをえなかった津田は、そのほろにがい失望感をふと「此水音以上に何倍か」自分を苦しめてきた清子との再会にかぶらせていく。「大根（おほね）を洗へばそれも此噴水同様に殺風景なものかも知れない」。もし清子に対する自分の想像と実像の間にも、このような隔たりがあるならば、いましがた受けた失望より「何倍か」大きな失望が押し寄せるに違いないという予感である。清子を追いかけてこの温泉場まできた津田が、急に彼女との邂逅にある恐れを抱くようになったのは、やはり「汽車に搖られ、馬車に搖られ、山の空氣に冷やされ、烟の出る湯壺に漬けられ」（一七三）つつ受けてきた自己省察、すなわち自己の内なる〈他者〉との対峙の影響であろう。

しかしながらいまの段階では、その清子はまだ津田の想念のなかに存在するだけであり、依然として「不可知な世界」である。津田は引き寄せられる好奇心を押さえ切れない。

不可知な世界は無論平凡に違なかつた。けれどもそれが何故だか彼の好奇心を唆つた。すぐ崖の傍へ來て急に鳴き出したらしい鵯も、聲が聽える丈で姿の見えないのが物足りなかつた。（一七九）

「魔境から今漸く覺醒した人のやうな眼」とは、日常的知性によって是非を判断し得る洞察力を備えた眼ということであろうか。そうした眼をとり戻した津田は、昨夜自分を異常な体験に陥し入れたものが、朝の光のなかでは「平凡といふより寧ろ卑俗」な庭の「殺風景な」「細工の源」の噴水であることを確かめる。それを語り手が「不可知な世界は無論平凡に違なかつた」と説明しているのは暗示的である。つまり一度でも自分の内なる〈他者〉と向かい合うといった異常な体験をしたことのある津田からすれば、日常的なるものに対してすでになぜだかそれに物足りなさを感じており、好奇心をそそられるのである。

「根つから旨くない」「蜜柑」をどうしても味わわないではやまない、また「鵯」の姿をこの眼で確かめないではいられないと感じている津田は、その日いよいよ清子を訪ねる。かれを待ち設けている彼女の部屋には「來客を待ち受ける準備としても、物々しい」（一八三）雰囲気が漂っている。だから津田は席につかないうちから、「凡てが改まつてゐる。是が今日會ふ二人の間に横はる運命の距離なのだらう」（同）と感じざるをえなかった。「魔境」のような昨夜に受けた「警戒」と「注意」の疑念は、万象があからさまに見える昼の世界でも、そのまま「運命の距離」となって津田に認識されたのだ。この二人の間の「運命の距離」は、昨夜宿の廊下で思いがけず出くわした出会いを津田の故意とみなしているらしい口ぶりからみて、明らかに清子にも意識されている。

「（前略）私隠しも何にもしませんわ、そんな事。理由は何でもないのよ。たゞ貴方はさういふ事をなさる方なのよ」
「待伏せをですか」
「えゝ」
「馬鹿にしちゃ不可せん」
「でも私の見た貴方はさういふ方なんだから仕方がないわ。嘘でも僞りでもないんですもの」（一八六）

津田があのとき「待伏せ」していたのではないかという清子の判断をそのまま事実として受け入れることには躊躇されるが、しかし少なくとも、清子が接してきた津田は「待伏せ」をさりげなくするような人であったとはいえよう。夫婦としての生活の間に妻のお延から受けとった津田の経験から生まれた、「畢竟女は慰撫しやすいものである」（一五〇）、「慰撫に限る。女は慰撫さへすればどうにかなる」（一五一）という津田の偽善的なフェミニスト的姿勢は、そのよい例であろう。それは清子の認識ともなっていたとみてよく、それが離反の原因につながったといっても過言ではあるまい。

津田からすれば、なぜ清子がそのように自分を邪推しているのかまったく見当がつかない。昨夜の不意の出会いが起きたとき、実は清子の存在をすっかり忘れていたのであって、自分ながら不思議だと思われたからである。だから、決して故意の行動ではなかった。あくまでも偶然の出来事にすぎなかった。津田からすればそう確信していえるはずだった。ところが、清子は「嘘でも偽りでもない」と自分の判断を改めようとはしない。

こうした二人の間のずれは、かれらの別れの経緯を推測するのに重要な手がかりになる。というのは、津田は清子と交際していたときにも、おそらく「待伏せ」の会話にみられるような偽善的なフェミニスト的言動をさりげなくしていたのであろう。けれども、そうした自分の言動を自覚できぬ人間でもあった。津田は「暗い不可思議な力」への省察もないままに、それに突き動かされる人間であったと言い換えてもよかろう。そうした津田の本質を見抜いた清子は、ある日、突然去ってしまったと解釈できるからである。次の一節にうかがえる津田の人間性は、こうした推測を可能にしてくれる。

> 彼は腹の中で、嘘吐（うそつき）な自分を肯（うけ）がふ男であつた。同時に他人の嘘をも根本的に認定する男であつた。それでゐて少しも厭世的にならない男であつた。寧ろ其反對に生活する事の出來るために、嘘が必要になるのだ位に考へる男であつた。彼は、今迄斯ういふ漠然とした人世觀の下に生きて來ながら、自分ではそれを知らなかつた。彼はたゞ行つたのである。だから少し深く入り込むと、自分で自分の立場が分らなくなる丈であつた。（一一五）

こうした人間性からすれば、確かに、清子が昨夜の不意の出会いに「待伏せ」を感じたのは「變ぢやない」、「當たり前」のことだといえる。そして津田が異常な体験のなかで、一時的にしろ、清子の存在を忘れてしまったとしても、ともかくも、清子との出会いを目的にしてここまでやってきたということ、しかも清子にはなんの連絡もとらなかったということ

からすれば、やはり「待伏せ」という言葉が決して間違いだといい切れるわけではない。しかし、「少し深く入り込むと、自分で自分の立場が分らなくなる」津田にしてみれば、昨夜の出会いの瞬間がくるまでの自分の意図と行為については、反省することもできないでいる。

自分の生き方に対して少しも省察することのできない津田には、清子の離反の原因が自分の方にあるとは思えないのだ。だからこそ、いまの自分をあらしめている自分の偽善的なフェミニスト的な姿勢には気づくことができず、そうなったことはあくまでも「偶然」（＝「暗い不可思議な力」）に帰するほかないのだ。

（津田）「いくら變だつて偶然といふ事も世の中にはありますよ。さう貴女のやうに……」
（清子）「だからもう變ぢやないのよ。譯さへ伺へば、何でも當り前になつちまふのね」（なお、津田と清子の補注は筆者による）
（一八八）

自分の離反の「譯」がわかっている清子からすれば、津田のもとを去ったということはなにも「偶然」ではない、因果律にもとづく言動で、「當り前」な結果であった。つまり清子は、自分の離反（果）はある「譯」（「待伏せ」に代表される津田の偽善的な愛の真相―因）によってもたらされた「當り前」な結果であるといっているのだ。これは、この小説の冒頭部において「ある友達」が聞かせてくれた「偶然」の話とみごとに照応しているではないか。同じ趣旨の話を「ある友達」に代わって、今度は清子が「彼の爲に」（一一）説明してくれている。『明暗』という作品が未完であるにもかかわらず、この未完の掉尾が冒頭部と照応して、今度は清子の口を通して繰り返されている。

この小説の冒頭部の津田にとって清子という女性は、「暗い不可思議な力」と併行して想起されるような謎めいた人物であった。したがって津田の想念にあっては、清子は「暗い不可思議な力」と重なってしまったとみてよかろう。冒頭部において清子が一度も場面に登場しないということが、一層この想念化を助長したのではなかろうか。その清子が未完の掉尾に津田の前にその姿を現した。読者は、ここに登場した清子を一箇の人格としてとらえるよりも、むしろ津田の想念の内なる「暗い不可思議な力」の結像（象徴）した人物、つまり津田の内なる〈他者〉の造型としてとらえるのではなかろうか。二人の間に交わされた「偶然」と「（變ぢやない）譯」の言葉が二人の関係を象徴している。それはまさに、象

徴的には津田自身の心理の表層と深層のダイアローグであった。しかし、「現在自分がちやんと其所に控へてゐながら、其自分が解らないで、他に説明して貰ふ」（一三九）しかない津田には、深層心理にひそむ「譯」に洞察が及ぶことはない。「頭では解る、然し胸では納得しない」（一五八）津田には、友人小林のいうとおり、深層の「譯」の説明よりも「事實其物に戒飭（かいちょく）される方が、遥かに覿面で切實で可い」（一六七）のかもしれない。最後の章の最後の行の、清子の口から洩れた「微笑の意味」（一八八）は、自己の内なる〈他者〉を受け容れることのできない津田に対する嘲笑として解釈すべきである。

## 七　未完の結末と「暗い不可思議な力」

『明暗』は、ある日突發した肉体の疼痛が原点となっている。そもそも疼痛というのは、我しらず肉体の内部（暗部）で、一刻一刻つのってきた病原（因）が、ある瞬間に外部（明部）に露呈した現象（果）の一つである。だから、実際には偶然でもなく突然でもない。作者が、自分の肉体の異変の前にただずむ人間を主人公として選んだのは、その異変の背後にひそんでいる因果律を知らせるためであるが、それはまた、次の「精神界も全く同じ事だ」（一）という、もっと根本的な問題を引き出すための序曲でもあった。

津田はその肉体の変化に触発されて人間の精神界も同じであることを知覚させられた。そして、あらゆる現象の深層にはある必然の因果律がひそんでいるという事実を友人による「偶然」の話を通してわかった。だとすれば、清子の離反からも、清子という女性の側に存在している離反に至る因果が―もっと的確にいえば、津田と清子との関係のなかで生じた因果であろう―刻々進行していて、それがある頂点に達したときに離反というかたちで明部に噴出した現象にすぎないということを認めるべきであった。ところが、津田は明部を超えて進むことができない知性の限界ゆえに、知性の暗部を象徴するところの謎めいた「迷宮（メーズ）」に陥ち入らねばならなかった。その「迷宮（メーズ）」から抜け出るためには、直接清子に会ってことの顛末を訊ねるよりほかなかった。それが津田の温泉場行きのもう一つの理由であった。結局津田は清子に会うことは会うのだが、肝心な離反の理由を聞き出そうとするところで、『明暗』の中絶とともにその謎は永遠にベールに包まれてしまった。

作者漱石は津田をその「迷宮（メーズ）」のなかに放置しようとしたのであろうか。換言すれば、人間の無意識の深層にひそんでいながら、おのれの理性や意志を超えておのれを支配する〈力〉のまえに、どうしようもない人間の知性の無力さを表そうとしたのであろうか。いや、そうではあるまい。人間の存在について絶えず深い関心を傾け、またそれを作品のなかにとらえようとしてきた漱石の軌跡からすれば、かえってそうした人間の姿に、解決の方法を提示しようとしたのではなかろうか。

これに関連して、ほかの作品に示されている作者の言及を参考にしてみたい。

病氣に潛伏期がある如く、吾々の思想や、感情にも潛伏期がある。此の潛伏期の間には自分で其の思想を有ちながら、其の感情に制せられながら、ちつとも自覺しない。又此の思想や感情が外界の因縁で意識の表面へ出て來る機會がないと、生涯其の思想や感情の支配を受けながら、自分は決してそんな影響を蒙つた覺がないと主張する。其の証據は此の通りと、どし〳〵反對の行爲言動をして見せる。が其の行爲言動が、傍から見ると矛盾になつてゐる。

（『坑夫』）

凡て是等の人の心の奥には、私の知らない、又自分達さへ氣の付かない、繼續中のものがいくらでも潛んでゐるのではなからうか。もし彼等の胸に響くやうな大きな音で、それが一度に破裂したら、彼等は果たして何う思ふだらう。彼等の記憶は其時最早彼等に向つて何物をも語らないだらう。過去の自覺はとくに消えてしまつてゐるだらう。今と昔と又其昔の間に何等の因果を認める事の出來ない彼等は、さういふ結果に陷つた時、何と自分を解釋して見る氣だらう。

（『硝子戸の中』三〇）

漱石は、自分さえ気のつかないものを内部にもち、それに制せられながら、そのようなものに無自覚なままに生きていく人間の存在性を問うてきた。この問いは、この『明暗』においてもそのまま「暗い不可思議な力」と向かい合う津田の存在を通してあらためて提示された。漱石はそれまでの作品においては、このような人間存在を問うことに苦悩する痕跡を諸所にとどめながらも、「何と自分を解釋して見る氣だらう」というふうにその決着をつけようとはしなかった。漱石がこのような知性や理性の奥にひそむ深層心理の因果律の前にただずみ、それをどう処理してよいかにとまどう人間のありようを絶えず問うてきたのは、そのような深層心理の問題に確固とした解決を得ることができなかったためであろう。

坂口曜子氏は、漱石の存在論の根底に、動かすことのできない真理として、人間は因果律の強い牽制の中に置かれた存

在であるという認識があるという。だからといって「漱石は、因果律の前には人間は無力であるとしているわけではない。この真理に目覚め、畏れ、因果の種である自己（我意・我欲・虚飾）を放下することができさえすればこの牽制から自由になれると漱石はしている」[10]と敷衍している。また、漱石とウィリアム・ジェイムズとの影響関係について綿密な考察をした重松泰雄氏も、やはり「人間を〈何時どう変えるか分らない〉あの『潜伏者』、いわば我々が『夢の間に製造した爆裂弾』（傍点重松）でもある、ジェイムズの『潜在意識的潜伏』にかかわる問題―とりわけ、その克服についての問題であったと思われる」[11]と説いている。

漱石は自分の意志や理性を超えて自分を自在に操る「潛伏期」の思想や感情であっても、それが「外界の因縁で意識の表面へ出て來る機會」さえあれば、自由になれるということは学問的にはすでに理解していた。この理解はその解決の方法をも示唆しているというべきではなかろうか。[12]

津田が肉体上の病気という「外界の因縁」によって、自分がある眼に見えない力（「暗い不可思議な力」）に支配されていることを直観することがあったということは、そうした漱石の深層心理学を作品内にもちこむ第一歩であると思われる。ただし津田は、その力には気づいたものの、「今と昔と又其昔の間に何等の因果を認める事の出來な」かったために、なおもその力に支配されている自分をはっきり洞察することができなかった。しかし、もし「遥かに覿面で切實」な刺激や機会があれば、津田にとっても「暗い不可思議な力」に対する洞察は得られるのではなかろうか。その機会がとりもなおさず「愛と虚偽」（一一五）について苦悩していたときの津田がふと思いついた「實驗の機會」（同）であったのではなかろうか。しかし、その機会がおとずれぬうちに作品は断筆されてしまった。

## 八　むすび

『明暗』は、無意識の深層に存在する因果律によって動かされる人間の姿を描いた作品である。だからといって、人間はそのような因果律のまえではまったく無力であるということを主張するための作品であったわけではない。むしろ、その因果律によって支配されるエゴイズムを直視する慧眼をもつべきであると訴えようとしたのではなかろうか。小説の始発部から、津田を唐突のように思われる「暗い不可思議な力」に直面させたのは、現在の自分をあらしめている因果律を

見つめるならば、「暗い不可思議な力」の支配から解放され得るということを示唆するためであった。そのような過程に愛とエゴイズムの葛藤というモチーフを投入したのである。漱石が津田に対する「暗い不可思議な力」の作用の具体として清子の離反を設定した理由は、そこにあったというべきであろう。未完のかなたにいるだろう津田は、清子との出会いを通して自分の愛が真実であったか、あるいは偽善的フェミニズムであったかについて明確な判断を下すだろうが、そのときには真摯な自己認識は不可欠である。そうした自己認識は、妻のお延との愛に対する反省を経ねばならぬだろうということも推測されるが、その過程こそとりもなおさず津田の「精神上の病気」の治癒となるのではなかろうか。

その具体的な治癒過程は、書かれなかった未完部に提示されたのかもしれない。したがって、その未完の結末を漱石が現存の『明暗』のなかにはりめぐらしてきたあらゆる伏線・暗示をたどることによって、可能な限りで想定することは興味深いことと思われる。『明暗』という作品の全体像を予測した上で、その「暗い不可思議な力」について考察することは、漱石における人間存在のありように迫るすぐれて価値のある方法であると思われる。しかし、その考察は別の機会を期してあらためて試みてみたい。

## 注

夏目漱石の文章はすべて『漱石全集』（岩波書店、昭和四一年～四二年）によった。

（1）小宮豊隆「『明暗』の構成」（『文学』第三巻第三号、岩波書店、昭和十年）二頁

（2）唐木順三「『明暗』論」（鳥井正晴・藤井淑禎編『漱石作品集成第十二巻・明暗』桜楓社、一九九一年）七五頁

（3）重松泰雄「『明暗』―その隠れたモティーフ」（竹盛天雄編『夏目漱石必携』別冊国文学No.5、八〇年二月）六三頁

（4）石崎　等「漱石生活風俗事典」（三好行雄編『夏目漱石事典』別冊国文学No.39、平成二年七月）

（5）三好行雄「『明暗』の構造」（注2引用書）二七五頁

（6）加藤二郎「『明暗』論―津田と清子―」（注2引用書）三三九頁

（7）坂口曜子『躓きとしての文学』（河出書房新社、一九八九年四月）二百頁

（8）浅井　清氏は「漱石と新聞小説」（『朝日新聞記者　夏目漱石』立風書房、一九九四年）のなかに、当時の新聞小説の形式について

「毎日千二百字から千六百字の分量で、百回から三百回ぐらい連載を続ける」と言及している。

（9）清水孝純「『明暗』キー・ワード考―〈突然〉をめぐって―」（注2引用書）二九二頁

（10）坂口曜子「漱石作家論事典（存在）」（注4引用書）一七八頁

（11）重松泰雄「漱石晩年の思想（下）―ジェイムズその他の学説を手がかりとして―」（平岡敏夫編『日本文学研究大成　夏目漱石Ⅱ』国書刊行会、平成三年）二二四頁

（12）前掲の重松泰雄氏の論によれば、ジェイムズが『宗教的経験の諸相』（一九〇二年）のなかで、潜在意識について語った部分に、漱石が深い関心を表明していることがわかる。その部分というのは、次のようである。

それは、私たちが合理的意識と呼んでいる意識、つまり私たちの正常な、目ざめているときの意識というものは、意識の一特殊型にすぎないのであって、この意識のまわりをぐるっととりまき、きわめて薄い膜でそれと隔てられて、それとはまったく違った潜在的ないろいろな形態の意識がある、という結論である。私たちはこのような形態の意識が存在することに気づかずに生涯を送ることもあろう。しかし必要な刺激を与えると、一瞬にしてそういう形態の意識がまったく完全な姿で現われてくる。

（「第一六・一七講　神秘主義」）

こうしたジェイムズの思想が、漱石における深層心理学的な理解をうながし、その痕跡が作品の諸処にとどめられているとすれば、津田にかけられた謎（「暗い不可思議な力」）も「必要な刺激を与える」ことによって、その解決の方法は提示されるだろうと予測することができる。そのとき、津田は「完全な姿で現われて」きた因果律を見つめることによって、見えない因果律の一形態として現れた「暗い不可思議な力」の支配から解放されるだろう。それがとりもなおさず、津田の「精神上の病気」の真の治癒であろうと思う。なお、引用文は岩波文庫『宗教的経験の諸相』（下）（昭和五十年十月、岩波書店）における桝田啓三郎氏の訳による。